nibaddhabhattaṃ dātuṃ ussahanti. *Pj.* p. 140.

(1) 家系

ゴータマ・ブッダは古い詩句においてはしばしば「太陽の末裔」[1]（Ādicabandhu）と呼ばれているが、漢訳仏典では「日種」と訳されている。それはかれの氏姓（gotta）なのである（*Sn.* 423）。つまりシャカ族のなかでのひとつの氏姓であり、太陽に由来する氏族の一人だと考えられていたのである。かれらは、太陽の末裔であると称し、系譜に誇りをもっていた。

特定の王家が太陽の子孫であるという神話は、インドだけのものではない。日本の皇室の祖先（天照大神）に関する神話もそうであるし、アメリカ・インディアンも同様の神話をもっていた。そうして日本人が皇室の起原に関する太陽神話を誇っていたように、インドの仏教徒もシャカ族が太陽の子孫であるということをおそらく誇っていたのであろう。ちなみに人類が太陽の子孫であるという神話は、インドの叙事詩にも説かれている。[2]

シャカ族が太陽の末裔であると称していたことは、かれらのあいだに太陽崇拝が行なわれていたことをいうのであろう。その心理的社会的根拠はかれらが農耕生活を行なっていたことを意味する。焼けつくような砂漠の生活においては、太陽は暑熱の源泉であり、人々に苦悩をもたらすから、砂漠の生活では太陽崇拝は成立しない。ところが農作物の生育が適当な温度と日光とを必要とするところでは、太陽は恩恵をもたらすものであるから崇拝の対象となる。アーリヤ民族が狩猟遊牧を主としてい

た時代には太陽崇拝はそれほどさかんではなかった。ところがかれらがインドのガンジス河流域に定住し、ことに日光を必要とする稲作に従事するにいたって太陽崇拝がさかんになった。稲作や甘蔗栽培に適するゴーラクプルからルンビニーにいたる地方にこの信仰が成立し、また十世紀以後のオリッサに巨大な神殿が建設されたのも十分に理解されることである。また湿気に恵まれた暑熱の地方、たとえば南洋やカリブ海の島々では、太陽の暑熱や日光はあたりまえのことであるから、やはり太陽崇拝はさかんにならなかったと思われる。ただし、後代の定型化した通説によると、[3]本来生まれによって王族たるものは太陽族（sūryavaṃśa）[4]である。これに反して王族でない者がのちに偉くなって王となると、月族（candravaṃśa）であると称した。

シャカ族の王が太陽の末裔であり、イクシュヴァーク王の子孫であるという仏典の記述は、じつはインド一般のこういう伝承にもとづいているのであり、シャカ族はコーサラ国に従属していたにもかかわらず、コーサラ国王と同じ系譜を要求していた。系譜に関しては同等の権威を標榜していたのである。

これに対して家の名に相当する姓の名はゴータマ（Gotama 瞿曇）であった。ある場合には氏姓（gotta）がゴータマであったともいう（*DN.* II, p. 52）。

『リグ・ヴェーダ』においては、ゴータマとはある詩人の名であった。[5]それが複数形では、かれの子孫を意味する。しかしかれがいずれかひとつの詩の作者であるとはされていない。ところがブラーフマナ文献になると、ガウタマ（Gautama）という名が出てきて、それはゴータマの子孫を意味する。[6]

一般サンスクリットで Gautama というのは「祖先に由来する名」(patronymic) である。すなわち「Gotama 仙人の末裔」という意味である。そうしてそれはバラモンの姓 (gotra) のうちのひとつの系統 (pravara) である。[7] それは碑文によっても確かめられる。[8] ところが仏典の記載はこれと合致しない。(1) ゴータマ・ブッダは、その氏姓 (gotta) がゴータマであったという (*DN.* II, p. 52)。おそらく仏教徒はバラモンの系統 (pravara) を問題としていなかったので、系統 (pravara) を氏姓 (gotra) と呼んだのであろうか？　しかしネパールのあたりの人々は氏姓 (gotra) と系統 (pravara) との区別を問題にしていなかったのではなかろうか。(2)「ゴータマ」とは、バラモン教の典籍によるかぎり、明らかにバラモンの名である。ところが仏典によると、シャカ族はクシャトリヤであったのにゴータマと称していた。

ところで Gotama はヴェーダ文献ではアーンギラサ (Āṅgirasa) 族に属する仙人 (ṛṣi) の名であり、その名は『リグ・ヴェーダ』讃歌のうちに現われている。[9]

仏典の古い詩句では、ゴータマ・ブッダは「アンギラサよ」と呼びかけられているが、当時の人々はヴェーダにおけるゴータマとアーンギラサとの関係を知っていたのであろう。この点でも仏典の記述はヴェーダの伝承に接続しているが、若干ゆがめているわけである。

Go は「牛」、-tama は最上級を示す語尾で、[10]「もっともすぐれた」「最上の」という意味である。Gotama という語が普通名詞として「最上の牛」という意味に使われた用例はないが、古代インド人がこの語を口にするときには、そのような連想をもっていたであろうと思われる。こういうわけでゴ

ータマとはインドではよい姓であると考えられていた。牛をとくに尊重する思想はヴェーダ聖典のうちに現われているし、さらに遡るとインダス文明のなかにも認められる。この思想にもとづいてゴータマまたはガウタマという仙人の名がヴェーダ聖典のうちに伝えられているし、またジャイナ教の開祖マハーヴィーラもゴータマという人に向かってしばしば教えを説いている。だからゴータマという姓も、じつはインド一般のものを受けているのである。[11]

さらにすでに牛が農耕に一般に使用される以前に、『リグ・ヴェーダ』時代からの慣習として、牛の乳を愛用し、また祭礼の際に牛を犠牲にささげてその肉を食することも行なわれていたし、牛はもっとも主要な財産と見なされていたから、「ゴータマ」という特別の氏姓の名が成立したのであろう。シャカ族はそれを継承し、当時すでに定住的な農耕生活を営み、一方、牛が重要な労働力として重んじられていたから、「ゴータマ」という氏姓名が一種の尊称としてすんなりと受け容れられたのであろう。

釈尊の家の代々の系譜は典籍によって種々異なって伝えられている。その大部分は単なる伝説にすぎない。

『五分律』[12] においては釈尊の家系を簡潔に次のようにしるしている。〔詳しくは、巻末の図表を参照。〕

尼拘(Sinipura)――象頭羅――瞿頭羅――尼休羅――浄飯(Suddhodana)――菩薩(釈尊)――羅睺羅(Rāhula)

さらに遡ってシャカ族の家系をたどるということもなされるにいたった。『マハーヴァストゥ』

(*Mahāvastu*, vol. I, p. 348) では、

サンマタ(Saṃmata)——カリヤーナ(Kalyāṇa)——ラヴァ(Rava)——ウポーシャダ(Uposadha)——マンダートゥリ(Mandhātṛ)——スジャータ(Sujāta)——イクシュヴァーク(Ikṣvāku)

の順であげられている。ここでは簡単であるが、つづいてパーリ文の『島史』第三章、『大史』第二章、漢訳の『長阿含経』[13]、『大楼炭経』[14]、『起世経』[15]、『起世因本経』[16]、仏伝的性格のものとしては『仏本行集経』[17]、『衆許摩訶帝経』[18]、律蔵では『四分律』[19]、『有部律破僧事』[20]、なお『彰所知論』[21]に出ている。これらの書では家系がながながとあげられている。[22]「いまそれらの対比は省略するが、それらの一例として、スリランカの伝説(『大史』第二章)と『四分律』にしたがって系譜を巻末に示しておいた。」これらの家系伝説を対比することによって、若干の特徴をよみとることができる。

(1) どの伝説も、シャカ族の祖先を「マハーサンマタ」としていて、これはみな一致しているが、「マハーサンマタ」(Mahāsaṃmata)とは、「衆議によって推挙された人」、「人民の選挙によって選ばれた人」という意味である。これは一種の社会契約説にもとづいた見解によるものであるが、最初の国王は人民の選挙によって選ばれたが、そののちかれの子孫が国王としてつづいているという仏教徒の伝統的見解がここに頭をもたげているのである。またシャカ族自体が会議を重んじ、共和制的な政体をもちつづけていたという歴史的事実の反映であろう。

(2) 過去の王としては、一般インドの叙事詩や伝説のうえで有名な国王を過去の系譜のなかにあげている。また実在した歴史上の帝王を祖先のリストのうちに加えている。アショーカ王も出てくる

し、また「微驎陀羅」を Milindra と還元することができるならば、これはバクトリアからインドに侵入した国王メナンドロス(Menandros)のサンスクリット名である。ギリシア人までも釈尊の祖先のリストのうちに加えてしまったのである。だから多少の根拠はあったにしても、諸王のリストはまったく恣意的につくられたものであるから、諸伝説のあいだに一致がないのも当然であり、またさほど歴史性をもっていない。

(3) 十人の転輪聖王の名は、『五分律』の原本が成立した時代におけるインドの主要な国々の名を反映している。

(4) 種々の所伝に相違があるのは当然であるが、重要な点ですでに相違が現われている。たとえば、スッドーダナ(Suddhodana)王の前の王は、スリランカ所伝によるとシーハハヌ(Sihahanu)、『四分律』によると師子頰(Siṃhahanu)であるが、『五分律』にはこの王の名があげてなく、スッドーダナ王の前の王の名は「尼休羅」となっている。

前掲や巻末の諸系譜からも明らかなように、釈尊の父をスッドーダナ[23]という。それは「浄い米飯」すなわち「白米の御飯」という意味であるから、漢訳仏典では「浄飯王(じょうぼんのう)」と訳している。また伝説によると、かれの四人の弟の名がみな「飯」(オーダナ)という語を含んでいる。これらの名からみても、当時シャカ族はすでに稲作を行なっていて、とくに白米の飯を珍重していたことがわかる。

スッドーダナはのちの経典では王(rājan)[24]と呼ばれているが、大王(mahārāja)と呼ばれることがない。その地方の支配者であったにちがいないが、大国の王と呼ばれ得るほどのものではなかった。「浄飯

大王」と呼ぶようになったのは、後世の理想化にもとづく。かれは名義上は支配者であったが、シャカ族は実際は共和制を行なっていたらしい。ともかく小さい国土の富んだ君主であったらしい。

また母の名をマーヤー（Mayā）という。両親の名はかなり古い仏典[25]に出ているので、まず確かであろう。マーヤー夫人は釈尊を母胎のなかに守り、死後は天の世界に喜び楽しむ[26]ともいわれている。のちの経典ではマーヤー夫人は王妃（devī）と呼ばれている[27]。〈マーヤー〉とは古代インドにおいて「神の不思議な霊力」を意味した。〔後代のインド哲学では〈マーヤー〉とは幻のような世界を仮現する原理を意味するが、この王妃の名にこのような観念をもちこむことは困難である。〕

釈尊の個人名は、シッダッタ（Siddhattha Skt. Siddhārtha, 悉達、悉達多、悉多太子）であったと一般に伝えられているが、それは「目的を達成した」「義（または利）を成就した」という意味である。ただこの名は原始聖典には現われてこないので[28]、後代の人の仮託ではないかという疑いをもたれるわけであるが、しかしそれと異なった他の個人名も伝えられていないので、右の伝説を否認する積極的な資料にもとぼしい。

〔個人名がはっきりしないということに、われわれは非常な奇異の感をいだく。仏典では、かれに言及しているときには、ボーディサッタ（Bodhisatta）とかブッダ（Buddha）とかいう。それはインド人の伝統的思惟方法にもとづくのである。たとえば近年でも大学者 Satis Chandra Vidyabhushana に言及するときには、はじめにあげられている個人名に言及しないでただ Vidyabhushana というが、これは高い学位を意味するので、日本語に直せば「博士さん」というような表現である。日本でも昔

は高貴の人に言及するときには、個人名をあげることを避けて、別の表現法を用いた。日本人にとっても決して異質的なことがらではない。〕

かれの家は王族であったから、かれは『種姓に関してはクシャトリヤ（王族）であり、クシャトリヤの家に生まれた[29]』（*D.N.* vol. II, p. 51）ともいわれる。〔王族の出身であったということは、ジャイナ教の開祖マハーヴィーラの場合でも同様である。〕のみならず、やや後代の経典では、ゴータマの家系のすぐれていることを強調する。

『じつに修行者ゴータマは、母の系統に関しても父の系統に関しても生まれ正しく、血統が純粋であり、七世の祖父まで遡るも、これより外れず、血統に関しては他から非難されることがない。』（*D.N.* I, p. 115）

当時はおそらく人民が勤勉であったために、豊かな生活環境をつくり出していたのであろう。後代の玄奘は『大唐西域記』のなかで、カピラヴァストゥ国について『土地はやや〔肥〕沃で、稼穡（かしょく）は、〔適した〕時に播く。気序（四季の運行）は寇（あやま）つことなく、〔住民の〕風俗は和暢（わちょう）なり[30]』といい、その周囲は四千余里[31]（日本の里程では四六〇里余り）あったとしるしている。中世にはかなり荒廃に帰したが、前世紀から次第に生産が高まったといわれている。

かれらが前掲の詩句で「富んでいる」というのはおそらく事実であったろう。この地方は今日でも、稲作を行なっているが、当時すでに水田耕作の状態に達していた。釈尊の父王の名が「浄い米飯」（Suddhodana）と称する点からも明らかである。そのほかに、この地方はガンジス河平原の諸国と山地

とを媒介するのに都合のよい土地であり、たしかに商業的な利点があずかって力があったにちがいない。

(1) Ādiccabandhu (*Sn.* 54 ; 540 ; 915 ; 1128 ; *DN.* vol. II, p. 287 G.; *SN.* vol. I, p. 192 G.; vol. III, p. 142 G.; *AN.* vol. II, pp. 17 G.; 74 G.; *Therag.* 1237). Buddha Ādiccabandhu (*SN.* vol. I, p. 186 G.; *AN.* vol. II, p. 54 G.; *Therag.* 158 ; 1023 ; 1212). Cakkhumat Ādiccabandhu (*AN.* vol. IV, p. 228 G.; *Therag.* 417 ; 1258). Ādiccā nāma gottena (*Sn.* 424).

(2) *MBh.* I, 65, 10 f.; W. Hopkins : *Epic Mythology*, p. 198.

(3) Lokesh Chandra 博士の説明による。

(4) sūryavaṃśa という語はサンスクリット辞典にも出ているが、sūryavaṃśī という語は出ていない。それは、ヒンディー語である。女性の形容詞（修飾語）としては、sūryavaṃśakā, 男性名詞としてはsūryavaṃśa meṃ utpanna puruṣa である。

(5) gotama について、グラスマンは次のように解する。gotama.m. [von gó], Eigenname eines Sängers, und im pl. Bezeichnung seiner Nachkommen (*Wörterbuch zum Rigveda*, Wiesbaden, Otto Harrasowitz, 1976, col. 411). 同辞典によると、Gautama という形は『リグ・ヴェーダ』には見あたらない。Cf. *RV.* I, 79, 10.

(6) A. A. Macdonell and A. B. Keith : *Vedic Index of Names and Subjects*, vol. I, London, 1912, pp 234-235 ; 240-241.

(7) John Brough : *The Early Brahmanical System of Gotra and Pravara*, Cambridge University Press, 1953, pp. 32-33 ; 103-110.

(8) Brough : *op. cit.* p. xvii, *Epigraphia Indica*, iii, 342.

(9) *PW.* s. v. Gotama.

(10) 名詞のあとに Superlativ を示す -tama という語尾の付せられることは、すでに『リグ・ヴェーダ』以来存する (*RV.* 491, 7=VI, 50, 7)。mātṛtama, a., Superlat. des vorigen [mātṛ], mütterlichst (Grassmann : *Wörterbuch zum Rigveda*, col. 1032).

(11) 釈尊の従弟で侍者となったアーナンダ (Ānanda, 阿難) もゴータマとよばれ、釈尊の継母であったマハーパジャーパティーはゴータミー (Gotamī, ゴータマ姓の女) とよばれた。

(12) 『五分律』第一五巻 (大正蔵、二二巻、一〇一ページ上—中)。

(13) 第三〇巻、大正蔵、一巻、一四八ページ下。

(14) 第六巻、大正蔵、一巻、三〇九ページ上。

(15) 第一〇巻、大正蔵、一巻、三六三ページ上。

(16) 大正蔵、一巻、四一八ページ上。

(17) 第四巻、大正蔵、二巻、六七二ページ上。

(18) 第一巻、大正蔵、二巻、九三三ページ下。

(19) 第二一巻、大正蔵、二二巻、七七九ページ上。

(20) 第一巻、大正蔵、二四巻、一〇一ページ上。

(21) 上巻、大正蔵、二二巻、二二一ページ上。

(22) I. B. Horner : "The Buddha's Co-Natal", *Kashyap Comm. Vol.* pp. 115-120.

(23) サンスクリットでは Suddhodana という (F. Edgerton : *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven, Yale University, 1953, p. 531)。サンスクリットの語連結法（サンディ）の規則によれば、Śuddhaudana となるべきであるのに、その語形が見られぬということは、プラークリットを用いていた仏教徒たちのあいだですでに Suddhodana という語形が確立していたので、サンスクリット仏教徒たちはそれをサンスクリット化して Śuddhodana としただけなのであろう。Śuddha は「純粋の」「それだけの」「まじりのない」「生」という意味がある。サンスクリット文芸においても、Śuddhasnāna とは、香油、栴檀粉な